

FRN310 フランス言語文化講読

3年 3,4クォーター

担当教員	松田 和之
授業形態	講義, 演習
単位数	2
曜日・時限	未定

授業概要

ジャック・プレヴェール(1900-1977)は、平易な言葉に深い情感をこめ、熱いヒューマニズムを息づかせることができた詩人である。この授業では、戦後の混乱期に幅広い層の読者から絶大な支持を得た彼の代表作『言葉たち』*Paroles* (1946)に収められた詩篇の数々を原文で精読する。

プレヴェールはシャンソンの売れっ子作詞家としての顔も持ち合わせていた。彼の詩の中には、作曲家のジョゼフ・コスマによって曲が付けられ、シャンソンの名曲として長く歌い継がれているものも少なくない。この授業では、彼らが制作した『枯葉』をはじめとするシャンソンの名曲の数々を、歌詞の内容を掘り下げて理解した上で、ヴァージョンの違いや歌手による歌い方の違いにもこだわりながら、多角的に鑑賞する。

加えて、「シャンソンの女王」エディット・ピアフの『愛の賛歌』をはじめとするシャンソンの歴史的な名曲や、さらにはミシェル・ポルナレフの『シェリーに口づけ』等のフレンチ・ポップスの名曲をも、歌詞の内容を正確に把握した上で鑑賞し、それらとの比較を通じて、プレヴェール&コスマ作品の魅力の秘密に迫ってみたい。

プレヴェールには、もうひとつの重要な顔があった。映画のシナリオ作家としての顔である。映画史上屈指の名作と称される『天井桟敷の人々』をはじめとして、彼が名監督マルセル・カルネと組んで世に出した作品群は、いずれも「詩的リアリズム」を代表する名画として高く評価されている。この授業では、プレヴェールがシナリオを担当したアニメ映画『王と鳥』（監督はポール・グリモー）を鑑賞し、その波乱に満ちた生成過程やこの作品が宮崎駿や高畑勲のアニメ作品に与えた影響等についても考察してみたい。

到達目標

- (1) 日常的に使われる言葉で書かれたプレヴェールの作品を原書で講読することで、フランス語の読解力と表現力を養う。
- (2) 詩の朗読やシャンソン、フレンチ・ポップス、そしてアニメ映画の鑑賞を通じて、音声面からフランス語に親しむとともに、フランスの文学やサブカルチャーに関する知識や感性を養う。

期待される効果

- (1) 詩作品の彫琢された言葉に接することで涵養されたフランス語の読解力を活かして、幅広いジャンルのフランス語の文章が読めるようになる。
- (2) 可能な作品については、テキストの英語訳をも配布する予定である。二言語で作品を読み比べる作業を通じて、フランス語のみならず英語の語学力をも鍛えることができる。
- (3) フランスの文化や思想、宗教に親しむことで、ひいては欧米の文化や思想、宗教に関する基礎的な知識が身につく。

先修科目

「フランス語 I～IV」(共通教育科目)

教科書・参考資料等

- ・特定の教科書を使用する予定はない。配布プリントをテキストに充てる。
- ・参考資料(参考図書・参考映画等)については授業の中で随時紹介する。ちなみに、近年発売された次の書籍は、日本語で書かれた初の本格的なプレヴェールの評伝として注目される。
- ・柏倉康夫『思い出しておくれ、幸せだった日々を一評伝 ジャック・プレヴェール』、左右社、2011年。

- ・プレヴェールが作詞したシャンソンの音源としては、授業でも用いる次のコンピレーション CD が、ブックレットも充実しており、優れた企画として注目される。
- ・『私は私、このまんまなの～プレヴェールのうた～』、ユニバーサル・インターナショナル、2004 年。

授業の方法

基本的にテキスト講読の演習形式をとるが、随時、講義的な要素も織り交ぜながら、扱う作品に関する理解を深めてゆきたい。各回の授業で講読するテキスト（プリント）は、遅くともその1週間前の授業時には配布し、予習に充てる時間が確保できるよう配慮する。音楽や映画に関連する授業ゆえに、CD や DVD などの AV 機器を有効に活用したい。

成績評価

受講態度等を考慮した平常点及び学期末のレポート（あるいは筆記試験）やリアクション・ペーパー、提出課題等への取り組みに対する評点から、総合的に評価する。

成績

- 40% 平常点
- 20% リアクション・ペーパー、提出課題
- 40% レポート（あるいは筆記試験）

授業スケジュール

第1回：ガイダンス等

最初に授業概要や使用テキスト、成績評価等に関する説明を行う。続いてプレヴェールの人と作品について概説し、次回以降のテキスト講読に備える。

第2回：プレヴェール入門 — 『朝の食事』精読—

初級フランス語の教科書で取り上げられることもある短詩『朝の食事』*Déjeuner du matin*は、詩集『言葉たち』の中でも特に平易な言葉で書かれた詩のひとつであり、最初に読むプレヴェール作品として最適である。男女の別れの光景が女性と思しき語り手の視点で淡々と描かれたこの詩は、全篇が複合過去で書かれているため、フランス語の基本的な過去時制である複合過去を学ぶ上でも恰好の教材となる。

第3回：シャンソンの名曲『枯葉』—プレヴェール&コスマの代表作—

名曲『枯葉』*Les Feuilles mortes*の歌詞を原詩との比較も交えながら精読する。歌詞の冒頭で用いられている条件法と接続法に注意しながら、語り手が別れた恋人に寄せる思いを読み解いてみたい。『枯葉』の歌詞から「私」《je》と「あなた（君）」《tu》の性別を特定することはできないが、より長い原詩を読めば、それが判明する。この事実が何を意味するのか、『枯葉』を歌う歌手の性別に注目しながら考察してみたい。

第4回：さまざまな『枯葉』—シャンソン、ジャズ—

最も知名度の高いシャンソンのひとつであるがゆえに、幾多の名歌手がこの曲を歌っているが、その受容は本国フランスにとどまらなかった。アメリカで英語の歌詞を得てポピュラー・ソングとして流行したのみならず、ジャズのスタンダード・ナンバーにもなり、多くのジャズメンによって愛奏されてきたのである。今回は、イヴ・モンタンやエディット・ピアフ、ジュリエット・グレコ等の歌唱を聴き比べるとともに、グレコと一時期恋愛関係にあった「ジャズの帝王」マイルス・デイヴィスのミュート・トランペットが冴えるキャノンボール・アダレイの名盤『サムシン・エルス』に収められた『枯葉』も併せて鑑賞してみたい。

第5回：エディット・ピアフと『愛の賛歌』

『枯葉』と並ぶシャンソンの二大名曲とも言うべき『愛の賛歌』*Hymne à l'amour*を取り上げる。「シャンソンの女王」と称されたエディット・ピアフの波乱万丈の人生に思いを馳せながら、彼女の代表作『愛の賛歌』の歌詞を熟読し、ピアフ自身が歌った録音を鑑賞する。『愛の賛歌』は、その歌詞に現在の事実と反する仮定を表す典型的な条件法の構文が多用されており、条件法の学習に最適な教材となるだろう。加えて、ピアフのもうひとつの代表作『バラ色の人生』*La Vie en rose*についても、やはり自作自演の録音を鑑賞してみたい。

第6回：プレヴェールにおける「鳥」のモチーフ

再びプレヴェールの詩集『言葉たち』から、「鳥」をモチーフにした2篇の詩、『練習帳』*Page d'écriture*と『鳥の肖像を描くために』*Pour faire le portrait d'un oiseau*を取り上げ、今回と次回（第7回）の時間を使って精読する。前者についてはシャンソンを、後者については有名女優の朗読を、読了後に鑑賞したい。小学校の教室を舞台とする『練習帳』は、自由を謳った反骨の詩人プレヴェールの面目躍如たる佳作だが、大胆なイメージの飛躍からは、彼が一時期シュルレアリスムの運動に加わっていた事実が思い起こされる。

第7回：プレヴェールとマグリット —シュルレアリスムとの接点—

プレヴェールと同様に「鳥」を好んで作品のモチーフにした画家にルネ・マグリットがいるが、二人には、ほぼ同時期にシュルレアリスムの運動に加わっていたという共通点がある。『鳥の肖像を描くために』を読み終えたのちに、この詩と『練習帳』のそれぞれに描かれた鳥のイメージを具現化したかのような趣があるマグリットの作品を紹介し、詩と絵画のジャンルの違いこそあれ、二人の元シュルレアリストの芸術には互いに相通じるものがあることを確認する。

第8回：フレンチ・ポップス名曲選

ジョー・ダッサンの『オー・シャンゼリゼ』*Les Champs-Élysées*やミシェル・ポルナレフの『シェリーに口づけ』*Tout, tout pour ma chérie*など、いわゆるフレンチ・ポップスの名曲の歌詞を読み、併せて曲を鑑賞する。プレヴェールの名前を挙げるまでもなく、シャンソンにおいては歌詞が重視される傾向が強かったが、フレンチ・ポップスでは、一概には言えないものの、歌詞よりも曲が重んじられる傾向が見られる。この点について、作品に即して具体的に検証してみたい。

第9回：冬の朝の永遠の一瞬 —プレヴェール短詩選—

映画の仕事にも携わったプレヴェールは、簡潔な言葉を連ねることで視覚的なイメージを喚起する術に長けていた。今回は、それがよくわかる短い詩を数篇取り上げる。さりげない日常のひとコマを遙かな時空へと解き放つ『公園』*Le Jardin*にはプレヴェールの詩のエッセンスが詰まっている。わずか11行の深遠なドラマを味読したい。加えて、スペインの保養地の名前をタイトルに掲げた短詩『アリカンテ』*Alicante*を読み、そこに描かれたオレンジの鮮やかなイメージとの関連で、シュルレアリスムを論じる際にしばしば引き合いに出される「地球はオレンジのように青い」というエリュアールの詩の一節に考察を加えてみたい。

第10回：プレヴェールの寓話詩『かたつむりの歌』

詩集『言葉たち』に収められたさまざまなタイプの詩の中でもひと際異彩を放つ『葬式に行くカタツムリの歌』*Chanson des escargots qui vont à l'enterrement*を取り上げる。ラ・フォンテーヌの衣鉢を継ぐこの寓話詩を読む際には、ユーモラスなキャラクターやとぼけた味わいのある筋書きに「メメント・モリ」の教訓がこめられている点を見落とさないように注意する必要がある。併せて、ジョゼフ・コスマが作曲した問題のシャンソンを、複数の歌手の歌唱で鑑賞してみたい。

第11回：第二次世界大戦とプレヴェールの反戦詩『バルバラ』

『枯葉』と並んで最も知名度の高いプレヴェール作品であると言える『バルバラ』*Barbara*を、この詩が書かれた時代背景を理解した上で、今回と次回の2回分の時間をかけて精読する。かつてある通りですれ違った女性に呼びかける「思い出してごらん、バルバラ」《Rappelle-toi, Barbara》というフレーズが印象的なこの詩は、代名動詞や命令法、それに二人称単数の《tu》と《vous》の使い分けの復習にも役立つはずである。

第12回：ブレストに降る三つの「雨」—『バルバラ』精読—

『バルバラ』の舞台となるブレストは、ゲルニカやオラドゥール＝シュル＝グラヌ、それに広島や長崎などと同様に、壊滅的な戦禍を被った悲劇の街であり、またフランスで最も降雨量の多い街のひとつでもある。プレヴェールはブレストに降る三つの「雨」を通じて戦争の不条理を告発しようとしたのだ。詩を読んだ後に、やはりジョゼフ・コスマが曲を付けたシャンソンの『バルバラ』を、複数の歌手の歌唱を比較しながら鑑賞する。

第13回：プレヴェールと戦争 —『バルバラ』から『王と鳥』へ—

シャンソンの名曲『バルバラ』には、発表当初、一時的に放送が禁止された意外な歴史がある。ブレストの街が廃墟と化した直接的な要因がナチスを駆逐しようとした連合軍の度重なる空襲にあった点に着目しながら、放送が禁じられた理由を明らかにし、プレヴェールの反戦思想について理解を深める。さらに、『バルバラ』が書かれたのとほぼ同時期にプレヴェールが映画監督のポール・グリモーとともに構想を練ったアニメ映画の存在に注目し、両作品の思想的な連関について考察を加えてみたい。

第14回：『王と鳥』鑑賞 —フランス・アニメ映画史上の金字塔—

プレヴェールがシナリオを書き、グリモーがそれを映画化した『王と鳥』*Le Roi et l'Oiseau* (87分)を、全篇通して鑑賞する。ちなみに、スタジオジブリの高畑勲と宮崎駿は、口をそろえて自らに決定的な影響を与えた作品として『王と鳥』を絶賛しているが、例えば『天空の城ラピュタ』等の彼らのアニメ作品との明らかな類似性に注目しながら鑑賞するのも一興だろう。

第15回：『やぶにらみの暴君』と『王と鳥』—プレヴェールとグリモーの信念—

『王と鳥』には、その旧ヴァージョンにあたる作品が存在する。世界的に高く評価されたにもかかわらず、プロデューサーの手が加わった旧ヴァージョン『やぶにらみの暴君』に満足できなかったプレヴェールとグリモーは、訴訟を起こして著作権とネガを買い取り、当初の構想どおりの姿に作品を創り直したのだった。『やぶにらみの暴君』と『王と鳥』のラストシーンを比較検討することで、彼らが自らの作品にこめたメッセージを読み解いてみたい。

事前・事後学習

- (1) 事前学習 (予習) : 上述したように、配布プリントをテキストとして用いるが、毎回、次の回に講読する箇所を指示するので、受講生は、事前に辞書を引きながら当該箇所を通読し、その大体の意味を理解した上で授業に臨んで欲しい。
- (2) 事後学習 (復習) : テキスト中の授業で講読した箇所をもう一度読み直し、文法事項等を再度確認するとともに、応用が利くフレーズの習得に励んで欲しい。また、授業時にとったノートを基に、教員の口頭説明やパワーポイント等から得られた知識を整理しながらテキストの理解を深める作業も怠ってはならない。